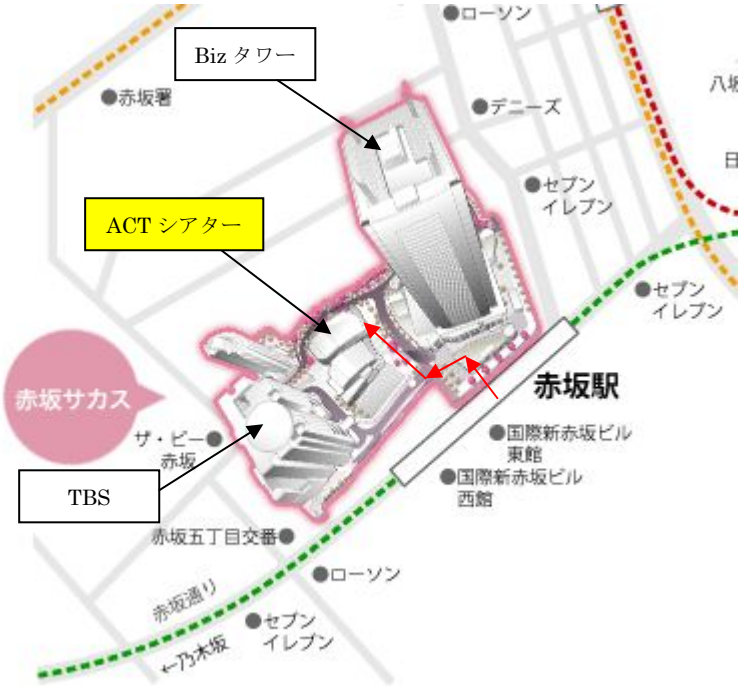
日出彦の歳時私記

中島みゆき夜会～夜物語～「元祖・今晩屋」

日出彦

今年度のみゆきさんの夜会に行ってきました。昨年の 11 月 20 日（木）の柿落としの日で、ちょうど親類の不幸があったところで気が引けながらも、観劇しました。昨年のコンサートツアーから、再び夜会に戻った今年は、場所も赤坂 ACT シアターに代わりました。TBS の周辺に再開発された赤坂サカス[1]の中にある新しい劇場です。シアターは地下鉄千代田線の赤坂駅から3分ほどの石段を上り詰めたところにあります。サカスは東京の新しい桜の名所で周辺に約100本の色とりどりの桜が植えてあり、シアター沿いの道路はさくら坂と名付けられています。



この日は午後にちょっとした打ち合わせがあり、開場時間間際の19時を少し回った時刻に着きましたが、既に坂の石段には2列になって長い行列ができていました。シアターの壁にはみゆきさんの夜会の看板が掛かっていて、人々がこぞって写真に収めていました。周囲の人の会話から、先頭は6時頃から待っていたそうでご苦労なことだと思いましたが、そのメリットはあとで分かりました。10分遅れで19時25分頃に開場され、列に従って中に入りましたが、サイン入り色紙は先着50名のみ、夜会特製羊羹は既に売り切れ、ということで今年はめぼしいものは手に入りませんでした。残念！　今年のグッズ販売は1階のホワイエ空間（つまり通路ですね）を

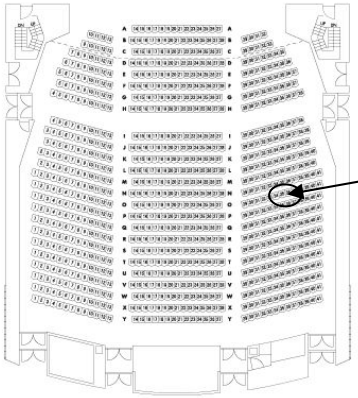
[1] サカス（Sacas）は「咲かす」（桜を咲かす、笑顔を咲かす、夢を咲かす）を意味しており、また坂の多い土地から「坂's」の意味も掛けてあるそうです。赤坂サカスの HP によると、Akasaka Sacas を逆にすると sacaSakasakA と坂が 3 つ並ぶからとも書いてありました。赤坂もサカスもローマ字回文なのですね。

使っているので、これまでと比べると狭く、品数も少ないように見受けました。

（これは別の日に撮ったものです）

（これは当日撮ったものです）

赤坂 ACT シアター[2]は2階建て地下1階ですが、客席は1階と2階です。小生は1階 P 列35番の席でした。今回はど真ん中というわけにはいきませんでしたが、みゆきさんを肉眼で見るのに苦労はしませんでした。（もちろんオペラグラスも用意しましたが・・・） 開演15分前に着席すると既に満員で、熱い気配が漂っているようでした。1階席890、2階席434の合計1324のシートがありますが、満員の集客力にはさすがに感心します。シート幅は他の劇場と比べてやや狭いように感じましたが、自分が太ったせいかも？ 力士のような人はどうするんでしょうね。



このあたりの席でした！

[2] 旧赤坂ミュージカル劇場で劇団四季などの演劇を行っていたが、四季劇場の完成で TBS に所有権が移り、赤坂 ACT シアターに名称変更された。しかし、TBS 旧社屋跡地再開発に伴って解体され、2008 年に新築オープンした。

8時に予定通り開演されました。パンフレットによると、今年のテーマは安寿と厨子王の後日譚ということのようですが、ちょっと難解なプロットで、いまだにうまく説明できません。二場の構成で、小生は Q&A のように感じました。第一幕、第一場は縁切り寺です。

暗闇の中で鐘の音が響き、その合間に水音が聞こえてきます。舞台に照明が入ると、中央に六角堂があり、それを包むような両側の崖から水が流れています。風呂敷包みを背負ったアオザイのような衣装でみゆきさんが登場です。本業は暦売りですが、お堂から仏具を持ち出して通行人に売りつける手癖の悪い露天商でもあります。劇中では狂言回しの役です。多分、10代の孤児でしょう。そのことが既に業（ごう）を背負っているようです。劇の上での主役は庵主さま、元画家のホームレスの大男、気の触れている廓（くるわ）から逃げ出してきた禿（かむろ）で、堂を巡ってどたばたと追いかけごっこを続けます。お堂から沢山の紙風船が客席の方に転がってきたり、それを使ったパフォーマンスをしたり、サプライスの連続で見せ場が続きます。最後に、庵主さんが大男を得度させて自分探しの旅に送り出しますが、気の触れた娘（赤い着物が暗示していました！）がお堂に放火するというできごとと重なって、最後は紅蓮の炎に包まれて崩壊する屋台崩しの場面が前半の最大の見せ場になっています。

みゆきさんの歌は新曲ばかりで、特に「「百九番目の除夜の鐘」のフレーズが何度も歌われ、煩悩を断ち切れない業の深さを歌い上げています。自分を失って悔悟する男（厨子王）と苦界から逃げてきた禿（安寿）という人物と、二人に手を差し伸べる庵主（安寿？）という図式が考えられます。安寿が身投げした池のほとりに建てられた尼寺がこの縁切り寺みたいですね。前

にも述べたように、みゆきさんの役は狂言回し、時にはコミカルに、時には熱情的に歌い上げます。[3]

最後は庵主も禿も欄干から身投げをして、大男も燃え落ちる堂の中に入っていってしまいます。歌から判断すると、都へ出かけたようですが・・・。最後はみゆきさんだけが取り残されます。

20分ほどの幕間で、1階にある ACT カフェで夜会カクテルを味わってみました。種類は「夜」という葡萄色のカクテルと、「海」というファインブルーのカクテルです。小生はみゆきさんの衣装色の後者をチョイスしてみました。味は？　スパークリングワインでしたね。

後半の第二幕では、そこは海底でしょうか？　沢山のカラフルな魚のフィギュアが天井から垂れ下がり、舞台中央に倉庫らしきものがみられます。第一場は水族館。海底の水族館（？）という疑問を持たせたまま、舞台は進行し、飼育係が魚の餌を撒きにやってきます（この人は前の場の庵主さまです）。みゆきさんはそこでも暦売りの役で登場。赤い水干のような衣装に変ります。暦というのはどうもタイムシャッフルの暗示のようで、山椒大夫の時代と現在が交錯する場面が続きます。大男も左官屋として登場しますが、記憶喪失は直っていません。自分探しを続けています。気の触れた娘は今度は純白の花嫁衣裳です。やはり何かから逃げています。前半は火でしたが、後半は水がテーマで、海底ですから幽界の人（？）、身投げした人のようです。幽霊交差点の歌が歌われましたから。だから、というのか消火栓のドアから出入りできるというのが奇抜で面白かった。第一幕は煩悩を燃やし、第二幕はそれを水に流すという意味でしょうか？　それとも、浄火、浄水を意味して、帰無にすることかな。

さて、突然暗転すると、敵討ちのような白装束で（多分安寿と厨子王の）男女が現れて、みゆきさんの暦売りに十文字の歌を歌い、引き抜きで黒装束に変り、目隠しをした（つまり盲目になった）母の役に変り、わが子を想う「ほうやれほ」の歌を歌います。

舞台が暗転すると、帆掛け舟になり、そこにみゆきさんを含めた3人の安寿が登場、大男は厨子王ですね。船出していきます。小生は補陀洛渡海[4]（ふだらくとかい）を思い浮かべてしまいましたね。船上で再開し、めでたし、めでたしのようにも思えますし、白装束から死出の旅とも思えました。

第三場で再び暗転して今晩屋が登場します。舞台いっぱいに水が手前に流れてくるという見せ場となって、みゆきさんも絶唱して舞台は終わりました。最後に出演者[5]とアンコールで出

---

[3] 次のブログ（http://blogs.yahoo.co.jp/tubameyo/57459763.html）によると、安寿、厨子王のほかに母親と女中の姥竹がいて、庵主が姥竹、みゆきさんが母親ではないかと書かれています。ここには詳しいあらすじが書かれていますが、そうだったかな？という記述も幾つかあり、結局、自分の記憶を優先してこの拙文を書きました。

[4] 補陀洛渡海とは、南方海上にあると想像された補陀洛世界に往生または真の観音浄土を目指して船出する宗教的実践行である。観音に対する信仰表出であり、漂流、入水の形態をとって行なわれた一種の捨身行であった。生きながら観音浄土へという補陀洛世界に魅せられて、多くの修行者の人々が小船を仕立て南方の海上の彼方へ消えていった。（www.ztv.ne.jp/web/kiho/nachihudaraku.htm）

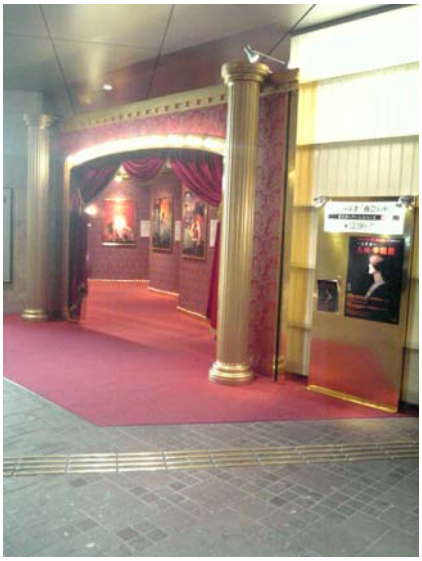
[5] 大男はコビヤマ洋一、庵主さまは香坂千晶、禿は土居美佐子でした。前二人は夜会の常連ですね。 1

てきたみゆきさんから口上がありました。初日に来てくれた観客へのお礼と、小さなミスもあったがつつがなくやり遂げたことへの安堵というような意味のことばでした。

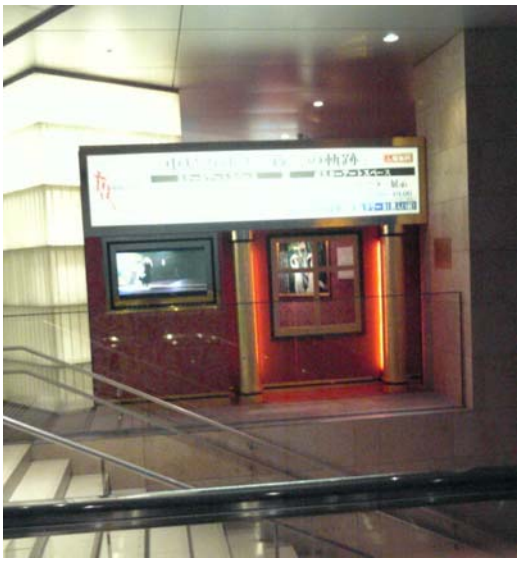
舞台が跳ねたのは10時半頃で、赤坂駅へ直行し比較的早く帰宅できました。

（付録1） 夜会の軌跡

Biz タワーの一階で夜会公演と同期して「中島みゆき夜会の軌跡」展が行われました。



入り口です。中で夜会のビデオも。



別会場。夜会のビデオを流していました。

すべての夜会のポスターが展示されていました。

（付録2）百九番目の除夜の鐘

百九番目の除夜の鐘
なり始めたならどうなろか
鳴りやまなければどうなろか

このまま明日にも成りはせず
このまま来生に成りもせず

やさしき者ほど　傷つく浮世
涙の輪廻が来生を迷う

垣衣（しのぶくさ）から萱草（わすれぐさ）へ
裏切り前の一日へ　誓いを戻せ除夜の鐘
---------- 中島みゆき（作詞・作曲）